

# 幕末平田国学と秋田藩

——文久期における平田延太郎（延胤）の活動を中心に——

天 野 真 志

## はじめに

幕末維新期、多様な勢力が新たな政治体制の構築を目指し、京都を主要舞台として活動を展開していく。朝廷・幕府・諸藩に留まらず、浪士など特定の政治基盤を持たない勢力までを取り込んだ政治変革過程は、幕末政局の一つの特徴であろう。本稿では、こうした多様な政治活動の一側面として、幕末期に全国的な広がりをみせた、平田国学の活動を素材として検討してみたい。

平田国学は、一八世紀末以降のロシアとの緊張関係という現実的危機を背景として、平田篤胤によって確立される。「霊の行方の安定」の確定と、階梯制秩序に基づく生活の安穩を説く平田国学は、農村荒廃や治安悪化など現状に強い危機感を抱く村役人層を中心として村落に広く浸透していく。やがて、幕末期に至ると彼等のなかから、角田忠行や松尾多勢子のような、国事活動を志し京都を目指す門人が多く現れてくる。彼等は他の門人等と共に、文久三年（一八六三）の等持院足利將軍木像梟首事件などの事件に関与し、幕末政局に影響を及ぼす政治勢力となっていく。一方、篤胤の学問は、幕末期における對外

的危機に伴う政治秩序の動揺をうけ、武士層においても広く受容される。福井藩の中根雪江や薩摩藩の岩下方平、福岡藩の平野国臣など、彼等は平田国学の影響を受けつつ、藩内外において政治活動を行っていく。幕末期の平田国学は、多様な身分や立場の門人による活動を介して、幕末政局に深く関与していく。

このような門人たちの拠り所となったのが、篤胤の学問であり、平田国学塾気吹舎であったが、篤胤没後、その学問を継承・普及し、気吹舎を統括したのが、篤胤の婿養子である平田鋈胤と、嫡孫延太郎であった。鋈胤・延太郎父子は、全国の門人や支持者に学問的指導を行うかたちで、門人たちの活動に影響を及ぼしていくことになる。平田父子はこうした学問活動を通して、幕末の政治動向に接していくが、彼等は幕末平田国学の統括者であると同時に、一方では篤胤以来出羽国秋田藩士でもあった。彼等は平田家当主・嫡子として平田国学を発展させていく傍ら、秋田藩士として、藩の政策や要求に応えることが求められていたのであった。こうした側面をもつ平田父子は、京都を中心に展開する幕末政局に対し、如何なる政治構想を展望し、その実現に向けてどのような行動をとるのであるのか。

近年の幕末平田国学研究は、宮地正人氏による一連の研究を端緒として、全国を網羅する門人ネットワークの解明や、気吹舎による出版活動など、主に気吹舎を中心とした情報・学問活動の実態が明らかにされつつある。また、平田国学門人の活動に関しては、これまでに多くの研究成果を得ている。<sup>(4)</sup>しかし、気吹舎を統括する平田家の活動、特に幕末期における平田父子の政治活動については、検討されることは少ない。<sup>(5)</sup>そのため、幕末平田国学の中核であった気吹舎、特に平田父子の、幕末政治過程に対する認識や政治構想、政治活動への展望については、具体的に検討されるには至っていない。さらに、秋田藩における平田父子の位置付けについても、平田国学思想に基づく検討が中心となり、必ずしも彼等の置かれた立場や、具体的な活動から秋田藩との関係性を明らかにしているとは言い難い。平田国学が全国規模の広がりをみせ、その門人が幕末政局に少なからぬ影響を及ぼしていることを踏まえるなら、その指導的立場にある平田家の発言や政治活動、さらに彼等が身を置く秋田藩内における活動形態を検討することは、全国に及ぶ平田国学門人の活動を考えるためには不可欠な課題であり、幕末期秋田藩研究においても、同藩の政治的態度を検討する上で重要な問題である。

そこで、本稿では、幕末期における平田父子、特に気吹舎を中心に門人等と活発な交流関係を築いていた平田延太郎の活動を中心として、秋田藩内における彼等の位置付けとそれに基づく活動について明らかにしたい。具体的には、京都に諸政治勢力が集結し、政治活動が活発に展開される文久期を対象として、彼等の活動を秋田藩の思惑や

政局との関わりなどを中心に検討していく。

## 第一章 秋田藩と平田国学

まず、文久期以前の秋田藩と平田国学との関係について概観してみたい。

天保一二年（一八四一）一月、幕府の沙汰により、平田篤胤が江戸を追放される。篤胤追放については、著作に対する嫌疑、<sup>(7)</sup>天保八年（一八三七）に越後国柏崎で蜂起した門人の生田万との関わりなど、<sup>(8)</sup>様々な要因が挙げられるが、この処分により篤胤の江戸における学問活動は禁止され、出生地である秋田へ送還されることになる。

一方、秋田藩では、江戸を追われた篤胤を受け入れ、天保一二年一月二四日には藩士として召し抱えることになる。<sup>(9)</sup>秋田藩では寛政期より人材育成を志向した教学政策を推進し、文化八年（一八一）にはその一環として藩校に和学方が設置される。<sup>(10)</sup>和学方は、主に神職の教育機関の充実を目指した大友直枝等による上申をきっかけとして設置されたものであったが、<sup>(11)</sup>財政難や人材不足などの要因が重なり、和学方は設置直後より停滞状況に陥っていた。<sup>(12)</sup>そうした状況下における篤胤の秋田送還は、秋田藩の和学教育において、大きな契機でもあった。篤胤は、天保一三年（一八四二）九月、藩より「皇朝古道学、著述出精可致候、且古道学追々入門之もの之在候ハ、無油断取立候様可致候」と著述・教育活動を奨励され、江戸にいた平田鋈胤へも同様の沙汰が下る。<sup>(13)</sup>同月、鋈胤は秋田藩江戸藩邸に長屋を拝借し、江戸にお

入 門 年	人 門 数							合 計
	久 保 田	雄 勝 郡	平 鹿 郡	仙 北 郡	秋 田 郡	山 本 郡	飛 地 領	
文化 9 年	0	0	1	0	0	0	0	1
天保 9 年	1	0	0	0	0	0	0	1
天保10年	0	0	0	0	0	0	0	0
天保11年	1	0	0	0	0	0	0	1
天保12年	8	0	1	7	1	0	2	19
天保13年	5	0	0	1	0	0	0	6
天保14年	14	0	0	6	0	1	0	21
弘化元年	2	0	0	6	0	0	0	8
弘化2年	1	0	0	0	0	0	0	1
弘化3年	0	0	0	1	0	0	0	1
弘化4年	0	0	0	1	0	0	0	1
嘉永元年	0	0	0	0	0	0	0	0
嘉永2年	0	0	0	1	0	0	0	1
嘉永3年	3	0	0	0	0	17	0	20
嘉永4年	0	0	0	0	0	4	0	4
嘉永5年	0	0	0	0	0	1	0	1
嘉永6年	0	0	0	0	0	0	0	0
安政元年	0	0	0	0	0	0	0	0
安政2年	1	0	0	0	0	1	0	2
安政3年	2	0	0	0	0	0	0	2
安政4年	0	0	0	0	0	0	0	0
安政5年	0	0	0	0	1	0	0	1
安政6年	0	0	1	0	0	0	0	1
万延元年	0	0	0	0	0	0	0	0
文久元年	4	0	0	0	1	0	0	5
文久2年	3	0	0	0	0	0	0	3
文久3年	20	0	3	0	0	0	0	23
元治元年	7	0	0	0	12	0	0	19
慶応元年	1	0	0	0	0	0	0	1
慶応2年	5	0	0	0	0	0	0	5
慶応3年	8	3	1	0	0	0	0	12
合 計	86	3	7	23	15	24	2	160

秋田領内の平田科学門人

※「門人姓名録」(『新修平田篤胤全集』別巻)より作成。文化10～天保8年は入門者がいないため省略した。

ける学問活動の拠点を<sup>15)</sup>得る。秋田藩の学問政策と篤胤との関係については今後の更なる検討を要するが、篤胤の秋田藩復帰を契機として、行き詰まり状態にあった藩校和学方を補完するかたちで、平田篤胤・鋳胤が秋田藩の和学教育を担うことになったといえよう。

江戸退去の後、篤胤は江戸での活動を画策し続けるが、その傍ら、藩内での教育活動を行っている。天保一四年(一八四三)に病死するまで約二年間で、秋田藩領における門人が急増するのは、篤胤のこうした活動の成果でもあった。一方、江戸においては鋳胤を中心とした活動が展開される。藩より学問活動を奨励された後、鋳胤は江戸にある秋田藩邸を廻動し、<sup>16)</sup>講談などによる交流を通して秋田藩門人を確保していく。

嘉永二年(一八四九)一二月、前將軍徳川家斉の七回忌の大赦により、篤胤の江戸追放が解除される。<sup>17)</sup>これをうけ、翌年五月、鋳胤は秋田にある篤胤の墓参りを名目として江戸を出立し、途中各地で普及活動を行いながら秋田へ向かう。<sup>18)</sup>この旅行の過程で、主に奥州で多数の門人を獲得し、秋田領内でも講談などの活動を通し、小野岡家・渋江家・梅津家などの秋田藩士との交流を深めていくことになる。<sup>20)</sup>

篤胤以来の普及活動により、嘉永期段階には門人ネットワークが全国規模の広がりをもよおすことになるが、嘉永六年(一八五三)のペリー来航に端を発する幕藩体制の動揺と国政をめぐる朝幕間対立のなかで、平田国学に対する関心に変化していくといわれる。桂島宣弘氏によると、門人等の関心について、主に死後安心論に象徴される「幽界」への追求に重点が置かれていた天保期以前に対し、嘉永期以降になる

と、そうした宗教的関心が後退し、天皇論や排外思想など、政治的側面が重視されてくるという。<sup>(21)</sup> 諸外国への対応や朝幕間の緊張関係など、現実の政治課題が深刻化していく嘉永・安政期の政治状況下において、その打開策を見出す手がかりとして平田国学が受容されている。気吹舎にはこうした彼等との面会や書状の往復を通して膨大な政治情報<sup>(22)</sup>が集積されることになる。

これらの活動によって形成された情報網に着目し、秋田藩は安政期頃より平田国学を情報収集に利用し始めるといわれる。<sup>(23)</sup> この情報利用が秋田藩の政策に基づくという確証はないが、平田家よりの情報提供に際し、重要な役割を果たしたと考えられるのが秋田藩重臣小野岡家である。小野岡家は、天保二年まで家老を勤めた小野岡松翁<sup>(24)</sup>（義音）が篤胤以来の懇意であり、またその嫡子市太夫<sup>(25)</sup>（義般）は天保一年に気吹舎に入門するなど、平田家とは密接な関係を形成していた。さらにその息子の右衛門（義礼）は安政五年（一八五八）に家老職に就き、彼もまた平田国学を支持する立場にあった。<sup>(26)</sup> 平田国学は、こうした藩内上層部に存在した支持者との交流を通して、情報面においても秋田藩に影響を与え始めることになったといえる。彼等の情報活動は、やがて秋田藩の情報政策に深く関与していくことになる。

## 第二章 文久二年の「御内勅」

### 第一節 平田延太郎の京都隠密探索と小河一敏

万延元年（一八六〇）三月、大老井伊直弼が殺害される。いわゆる

桜田門外の変の発生により、安政大獄は終焉を迎え、公武一和への希求が高まっていく。こうした動きに反応して、諸藩による国事周旋活動も活発になっていく。文久元年（一八六一）に始まる長州藩の朝廷・幕府に対する航海遠略策の入説、さらには翌文久二年（一八六二）島津久光の率兵上京と朝政・幕政改革の要求を端緒として、文久期の政局では、朝廷・幕府・諸藩を中心として公武一和の実現とそのあり方を模索していくことになる。<sup>(27)</sup>

京都を中心に政治改革へ向けた政治運動が高まりをみせるなか、文久二年四月二九日、秋田藩主佐竹義就が参府する。義就参府直後の五月一八日、秋田藩は、江戸藩邸を中心に学問活動を行っていた平田延太郎に対し、情勢不分明な京都情勢の探索を命じる。<sup>(28)</sup> この探索の背景については、当該期秋田藩の京都詰機構との関わりから指摘したことがあるが、ここでは平田国学との関係から検討してみたい。

延太郎に探索命令が下る前、延太郎は秋田藩に対し、以下のような進言を行っていた。<sup>(29)</sup>

- 一、不容易時勢二相成候二付而は、御探索之事精々無御座候而は不  
相叶儀と奉存候、此事は書取二仕兼申候、
- 一、万一探索之人上京被仰付候ハ、久世様御上洛以前二彼地へ不  
罷越候而は、道中并彼地探索往来等不都合二可相成哉二奉存候、
- 一、京都・大坂等詰合之人も有之候間、乍憚其筋御行届と奉存候得  
共、総而風説二も表向と内密との差別も有之、内々之中二も又極  
密之事も可有之候間、表向之風説は兎も角も、内密之事を探索仕  
候処専要之事かと奉存候、

一、世間一ト通り懇意之咄合ニ而探索仕候而は、矢張表向之事計り  
二而、密事は相分り申間敷、仮ニ同志之体を見せ候程ニ無御座候  
而は、内実之处相分り申間敷哉ニ奉存候、

一、彼地詰合之探索ニ而御不足は有之間敷候得共、猶江戸表之事情  
をも心得居候ハ、彼地之事を探索仕候ニも手近き事と奉存候、  
一、堂上方は高貴ニ被為在候故、凡下之者とハ隔絶之様ニ御座候得  
共、却而時勢ニは至極御手近く被為在候間、其筋<sup>江</sup>立入候ハ、御  
深密之事も相分り可申、尤同志之意味を含ま申候而は相叶申間敷  
奉存候、

一、彼地諸方より之文通ニ而大略は相分り候様ニ御座候得共、諸説  
紛々ニ而何レか実事、何レか虚事と申事も相分り不申、右御用一  
ト通りニ而上京致候ハ、随分事実聞糺し之道も可有之奉存候、  
提出の具体的な日時については判然としないが、おそらく藩主義就  
参府直後に、當時在府家老であつた小野岡右衛門<sup>30</sup>に提出したもの  
ではないだろうか。ここで延太郎は、京都・大坂における情勢探索、  
特に「表向」の風説では把握し得ない「内密」・「極密」情報を入手す  
る必要性を述べ、そのためには、密事に携わる人物と「同志之体を見  
せ」ることが重要であるとする。さらに、当時京都で時勢に詳しいの  
は堂上方で、彼等と交わることができれば「御深密之事」も容易に入  
手可能であり、これらの要素を踏まえて上京すれば、虚実不分明な京  
都情勢も詳細に把握することができると進言している。ここで延太郎  
が、自身の派遣を促しているかは定かではないが、こうした進言をう  
け、秋田藩は延太郎へ上京探索を命じることになる。

五月二〇日、平田延太郎は江戸を発し、大坂を経由して六月七日に  
は伏見の秋田藩邸に到着する<sup>31</sup>。延太郎が入京した前後、京都では薩  
摩・長州兩藩を中心とした諸藩の国事周旋活動が活発化し始めてお  
り、延太郎もこうした動靜に関して、在京門人や知人を通して詳細な  
情報を手にする。特に四月に発生した寺田屋事件については、門人だ  
る薩摩藩岩下佐次右衛門等に対面して、事件の顛末や久光上京の目  
的について尋ね、「上下不熟之处を一和二被成、皇威之相立德川家之  
御長久を專御扱被成候様との見込」であることを説明されている<sup>32</sup>。ま  
た懇意の長州藩士である小出勝雄、門人の徳山藩士船越清藏等より長  
州藩内の情勢、とりわけ長井雅楽の藩内における位置付けについて探  
索を行っている。

こうした諸藩士との交流のなかで、延太郎が入京後先ず接触を求め  
たのが、豊後国岡藩であつた。六月七日に伏見に到着すると、大坂で  
「知人」が伏見にいと伝え聞き、伏見で岡藩邸を探している。しか  
し、伏見には岡藩邸は存在せず、その日は面会することができなかつ  
たようである。ここで延太郎が探している「知人」として想定される  
のが、岡藩士小河一敏である。小河は安政期頃より宮部鼎藏・真木和  
泉等と交流を持ち、藩内外で国事活動へ向けた活動を行い、文久二年  
の伏見挙兵計画では、薩摩藩有馬新七等とともに主導するなど、文久  
期京都を中心とした国事活動に深く関わっていくが、実は小河は安政  
六年（一八五九）に気吹舎に入門した平田国学門下であり、且つ延太  
郎とは懇意の關係であつたようである。

六月九日、小河と面会した延太郎は、小河の活動の目的について説

明をうける。

一、同日中川様御家中小河弥（九リ）右衛門と申人私旅宿へ罷越候、此人は懇意二付最初より之始末相尋候処、同人答候は、当正月頃より薩州二而追々義挙之沙汰有之、既二近々相発し可申由風聞甚敷相聞へ候二付、二月三日私共国元出足、薩州へ罷越候処、境口嚴重二而通行難相成、其内追々諸国之浪士も集り、薩藩之懇意を呼出し対談之上、鹿児島御城下へ罷出模様承り候処、弥近々可及干戈趣二付、直様帰国致し家老中へ申談候処、早速二も人数差出し助力可致筈二候得共、当時君侯御在江中二付、表向差出し候事二は相成兼候間、有志之者は銘々届捨二而出張致候ハ、差支無之趣二付、士分以上都合三十人程国元出發致し、薩州へ罷越候事二御座候、世間二而は彼是と多人数之由申触候得共、浪士は三百人計二御座候、右人数は中国・九州・四国辺之諸家大方三、五人、或は両三人宛罷出申候、弊藩は第一之多人数二御座候、只鍋島様之御一家而已一人も不罷出、是は御存意何共難計、一説二は此節対州を始朝鮮国を略し候積り二而、追々彼地へ人数被差渡候趣之風聞も有之、右二付鍋島御藩へは何事も申合不致候、当時は私事も諸浪士と同様薩州様之食客同様二罷在候得共、窮屈之事も無之、日々諸方往来も致居申候、尤薩州より京師二出居候人数之内千人計は三郎様関東へ御召連二付、当時は諸士七百人計り、其外又者等迄二而、総人数は千五、六百人計有之、長州は若殿様御逗留二付薩州よりは多人数二御座候、土州様は是迄御国許混雜有之、兵庫迄は式、三百人出居候得共、当地二は格別之人数も無之候処、

此節二至り追々多人数出張之趣二御座候、扱又薩長之御間柄不熟之様二風聞有之候得共、左二は無御座、私共二至る迄日日双方往來仕居候故、御不熟之事は有之間敷、乍去長井雅楽は少々異論も有之候故、万一不熟之節は土州様御取扱之積り二内々相成居候由、極密相咄申候、

右によると、小河は薩摩藩による「義挙」の風聞をうけ、中国・四国・九州諸藩士等を糾合して薩摩藩への協同を目論んでいた。小河等在京浪士のこうした企てを制し、彼等とともに一連の活動を主導していた在京薩摩藩士を処分したのが、島津久光主導による寺田屋事件であったが、延太郎との談話によると、小河はその後薩摩藩邸に身を置きながら、諸藩の結集を画策していた。さらに、延太郎が「御同志之諸家様方」について詳しく尋ねると、小河は、諸藩とも「御一同と申程」であるが、嫌疑を恐れ表向きの活動は控えていること、「御魁をも可被成程之御勢ひ」があるのは薩摩・長州・土佐藩のみであり、東国諸藩に至っては彼等の会合に全く顔を出さず、情勢探索の人物すら上京させていない状況であることを伝えている。小河は、五月頃に大原重徳を介して朝廷に提出した建言で、「列藩朝家を奉戴」る体制の確立を主張していた<sup>⑤</sup>。延太郎に対する説明を、こうした小河の主張と踏まえて勘考すると、小河は右の主張を実現するために、在京諸藩士を介した全国諸藩による連携を目指した活動を行っていたといえよう。延太郎による門人等との交流関係を通じた情報活動は、このような水面下で展開する政治工作まで把握することが可能であった。小河の主張に対する延太郎の反応はここからは窺い知れないが、こうした

交流は、延太郎にとって情報活動に留まらない活動へと展開する端緒となりうるものであった。延太郎は、小河との関係を通じて活動の可能性を模索していくことになる。

## 第二節 岩倉具視と「御内勅」

小河と面会した翌日の六月一〇日、延太郎は小河より、「明朝岩倉中将様貴殿へ拝顔被仰付へき二付、私へ御同道申様との義御座候」と、岩倉具視との面会を仲介される。周知の通り、この時期岩倉は、文久元年の皇妹和宮降嫁を画策し、翌年五月の勅使下向に際しては、「三事策」といわれる幕政改革案を起案するなど、桜田門外の変以降、公武一和に向けて朝廷側からその実現を目指す活動を行っていたが、この時期小河は岩倉と交流をもっていたようで、こうした関係を通して、延太郎に岩倉への面会を仲介することになる。一四日、延太郎は岩倉具視より呼び出しをうけ、翌一五日に岩倉より次のような依頼をうける。

(略) 此節追々薩長之外諸大藩より内々重臣等為差登申上候趣も有之、朝廷ニは諸藩之事情も大旨 御承知被為在候、然ル処此度其許上京之儀内々其御筋之御聞ニ達し、幸之事故対面いたし度、右は 叡慮之趣議奏衆より御内意之趣も有之相尋度旁致対面候、扱時勢之事定而承知も可有之候得共、大略申聞候との御事ニ而、是迄之次第も委曲御咄被為在、春中関東有司之所置追々不正之事共相募候処、関西有志之人々蜂起二付、朝廷ニも是迄之議二不被為構、薩長へ 御内勅を被下、右両家頻り二周旋ニ而、当今は

大二振合も相替り、其上越前春嶽等<sup>(38)</sup>是又取扱ニ而先ツ一廉は 朝廷ニも御安堵之御筋ニは被為成候、乍併素より 朝廷ニは関東を斃し候様之 叡慮は毛頭不被為在、只々天下太平、上下一和同心して外夷之御所置可被遊との御事ニ而、御例も無之、且 御本意ニは不被為在候得共、関東之懇願ニ任せられ、皇妹御下向迄勅許被遊候処、更ニ其駭も無之、益関東ニ而は朝廷を奉欺候事而已有之、且世上不服之者多く、弥不穩候二付、深被悩 宸襟、無御扱先般薩長へ 御内勅を被下候事ニも相成候而、先ツ一廉は 御安心之筋ニ相成候段、前ニも申候通ニ候得共、猶此上諸藩一同ニ無之候而は、実ニ 御安慮之御場合ニも不相至候二付、今度島津三郎を以其許 御主人へも及相談候様被遊度、近日 議奏衆より 勅使大原殿迄 御内意之趣被仰遣候筈ニ有之、右之御都合ニ相成候而、其許 御主人ニは御迷惑之筋有之間敷哉、呉々も関東を斃し候様之 叡慮は不被為在、上下一同して奉休 宸襟、次ニは 徳川氏を御扶助被遊、天下太平ニ被遊度との 思召ニ而、決して戦争を被為好候様之 御事は不被為在候間、誰人ニも不承知は無之筈ニ候得共、一応其許内存をも聞置度旨、御掛り之御方々より 御内意之由被仰聞候、

岩倉は、朝廷側の意図として、対外問題への対処には、「上下一和同心」が不可欠であり、その実現のためには、「諸藩一同」による公武周旋が必要であることを延太郎に説明する。その一環として、勅使大原重徳とともに江戸へ向かった島津久光と「其許御主人」、すなわち佐竹義就の協同を依頼する。岩倉は、諸藩による国事活動が、朝廷

が幕府を倒すためではなく、公武一和を成し遂げ、徳川家を扶助して天下太平に導くための要素として位置付けている。岩倉は、薩摩・長州兩藩のみならず、諸藩一同がその役割を担うことを必要とし、そのために秋田藩の国事活動を期待する。朝廷を頂点としてその下に幕府を位置付け、朝幕間が一和となるために諸藩連携の必要性を説く点は、先にみた小河の主張と共通するものがある。小河や岩倉は、諸藩連携を実現させるために、延太郎を通して秋田藩の協同を要請したと考えられる。さらに岩倉は、薩摩・長州兩藩のような「西国之一諸侯」が公武間の周旋を引き受けたとしても、関東方面での活動には不都合が生じる可能性があり、「万々一関東におゐて不都合之次第出来之筋は、取扱之事 御願之御内勅を其許御主人へ被下候儀も可有之」と、主に幕府周辺に関する周旋活動を援護するよう要請し、その際には藩主佐竹義就に対し「御内勅」を下す旨まで伝えている。延太郎の京都を中心とした情報活動は、公武周旋を目指す諸勢力との交流を通して、秋田藩への内勅降下へと発展していくことになる。

ところで、小河と延太郎が懇意であったとはいえ、こうした内勅降下をも視野にいたれた国事活動の要請が、何故秋田藩に下されることになるのだろうか。実はこの会談の数日前、岩倉は中山忠能等に次のように伝えていた。

一、佐竹藩平田信太郎（マツ）今朝面会承候処、昨日小河より承候とハ少々相違候、今度模様主人承知ニ而得内意出京ト申訳ニハ無之候、本人申候ニハ、かね／＼勤 王之志有之事ハ東北ニ不恥心得二候、主人ハ勿論家老宇都宮帶刀、用人ニ川尻正助・石井宮作・飯塚伝

也、右等正議ノ由、此中ニも輕重候得とも、宮作杯ハ殊ニ一物ニ而候、此外要路ニ無之分ハ数多有之候、右ニ付御内 勅杯こそ御六ヶ數候共、元々御内 勅被下候島津江御役人中ヨリ御内沙汰ニ而、佐竹家ハ有志之旨御聞及候間、同人江可申語ト丈御沙汰相成、嶋津より佐竹江ヶ様之御内沙汰も有之候、貴国ハ如何と被誘候ハ、速ニ可相応候事明鏡トノ事ニ候、右ニ至り候ハ、佐竹家之面目尚東方大小名語合同志之輩嶋津家ニ附屬可為致トノ事ニ候、一、右平田延太郎見込ニ而、主人内意又は自分より願候と申二而ハ無之候、元々本人願杯有之候而ハ、一分主家江心配と申居候、呉々も只從御所島津へ御沙汰と申丈ニ候、

一、本人至而実貞之者と見受申候、若々右弥御内沙汰相成候ハ、神速ニ発足、先歸府少子方へ罷出候所、ヶ様之御様子ニ而候ト申述、嶋津より沙汰次第可相応手筈可仕トノ事ニ候、

一、本人立願と申二ハ無之候得共、此機会ヲ不失様と頼りニ申居候、口氣実ニ投身命被行度様子ニ候、

一、佐竹當時至而貧窮ニ候間、多勢繰出し杯ハ六ヶ數候得とも、少々之事ハト申居候、少子夫ニハ不及哉、右ハ弥非常之時之事、只今ニ而ハ島津ニ力ヲ添、関東一新正論ニ相成候ハ、よろしき而已と申居候、

一、別紙二通、著書二組持参に候、  
一、奥羽之間ニ而ハ伊達家ニ引続キ家柄之由ニ候、関東取扱も別段と申居候、かねて申上候通、嶋津三郎ニも伊達家振起候ハ、ト申事頼りニ堀ヲ以申居候、重畳ニ存候、

岩倉によると延太郎は、秋田藩内には「勤王之志」のある者が多数存在しているため、薩摩藩より誘われさえすれば迅速に対応し、秋田藩が薩摩藩へ協同するならば、「東方大小名語合同志之輩」が薩摩藩へ連なると説いている。さらに延太郎は、これらの活動が秋田藩側からの依頼ではなく、朝廷より薩摩藩へ沙汰を下した上での要請として欲しい旨を付け加えている。延太郎の秋田藩へ対する配慮であったが、岩倉が、「口気実ニ投身命被行度様子」であったというように、

延太郎の秋田藩を挙げた政局参入の意志が見てとれる。これに対して岩倉は、奥羽の中で仙台藩伊達家に次ぐ家柄の秋田藩佐竹家は「関東之取扱も別段」と、あくまで薩摩藩の補助的役割と位置付けつつも、特に幕府との周旋に対する秋田藩の活動に期待を抱いている。秋田藩への要請は、延太郎のこうした水面下での工作に基づくものであった。延太郎の京都での活動は、在京門人等と交わり、その活動に連なることで、秋田藩に国事活動への参入を促すものでもあった。こうした延太郎の活動から生じた公武周旋要請に対し、江戸の佐竹義就等はその対応に苦慮することになるが、秋田藩内における平田国学は、延太郎の探索活動を通して、情報収集活動にとどまらず、秋田藩の国事周旋を展望する政治活動へと発展する志向性を見せ始めていた。

井伊直弼の死後、朝廷・幕府・諸藩を中心とした公武一和にむけた政治活動が京都を主要舞台として展開する。こうしたなか、秋田藩は、平田延太郎より京都情勢探索の必要性を提言をうけ、延太郎に京都探索を命じる。延太郎は平田国学門人を中心とした情報網を活用して京都情報を入手する一方で、小河一敏等の活動に連動して秋田藩の国事

周旋活動を促す政治工作を行うことになる。延太郎の活動は、秋田藩が期待した情報活動を超えた、政治活動へと発展する可能性を内包したものであった。この後、京都を中心とした諸政治活動に連動し、延太郎等平田国学勢力の動きも活発化していくことになる。

### 三章 秋田藩平田国学派と京都

#### 一節 佐竹義堯上京と周旋活動

文久二年六月一日、將軍上洛の旨が布告される。在府中の秋田藩主佐竹義堯<sup>③</sup>は、先例に基づき閏八月二七日に上洛供奉を内願し、一〇月から上京に向けた準備をはじめが、その一環として、先発上京を命じられた家老宇都宮帯刀への随従を平田鉄胤に命じる。秋田藩は、平田延太郎の上京探索で生じた、彼等の政治活動への志向性を懸念しつつも、<sup>④</sup>彼等の持つ情報網に期待を寄せていた。

文久三年一月二八日、佐竹義堯が上京するが、その直後、イギリス船が横浜に渡来し、前年に発生した生麦事件の賠償要求、拒絶の場合は攻撃を開始する旨を傳達する。対外戦争への危機に直面した幕府は、<sup>⑤</sup>朝廷へ事情説明の後、二月二六日に在京諸藩へ帰国の上領内沿岸の防備を指示する。<sup>⑥</sup>この達をうけ、義堯も三月一四日に京都を発つことになる。わずか一ヶ月余りの京都滞在中、義堯は二月九日、一八日に参内し、伊勢神宮警備及び隠岐・対馬の防禦に関する諸問をうけた程度で、<sup>⑦</sup>秋田藩として目立った活動を行うことはなかった。ではこの間、藩内平田国学勢力は、京都でどのような動きをみせていたのだろ

うか。

當時在京中で文久二年に気吹舎へ入門した秋田藩士の小川亀雄は、江戸の延太郎に対し、「私事<sup>(三月)</sup>当月十六日周旋方御免相成候間、一寸申上候、粕谷氏同様ニ御座候得共、残念至極成る事ニ御座候<sup>(四)</sup>」と伝えている。これを見ると、秋田藩は佐竹義堯上京に際し、鉄胤の登用のみならず、藩内平田国学勢力を周旋方に起用し、情勢探索を試みていたようである。右の小川の書状からは、彼等が罷免された原因は明らかではないが、実際は、彼等の活動に対して秋田藩が警戒を示したためであつた。<sup>(五)</sup>少し時期が下るが、文久三年九月に京都へ派遣された家老戸村十太夫は、国許家老衆に対し、在京藩士のなかに「他所付合」を行う者が存在することを報知し、彼等の活動を問題視している。さらに、戸村上京以前から「他藩付合決而不相成」と、在京藩士と他藩士との交流を藩は禁止している旨も確認している。<sup>(六)</sup>実は、宇都宮とともに先登上京を命じられた平田鉄胤は、上京前の文久二年一月に、自身の上京の目的について伺いをたてているが、そこでは、「薩長土御三藩共二門人数人御座候内、取分薩州ニ於ハ亡父以来之門人共多勢有之」ため、三藩の情勢は探索可能としつつも、

此度上京被 仰付候御用向右御三藩御同様勤 王之御儀第一之思召ニ被為在候ハ、御三藩一同申合、乍恐御順宜之方々都合宜敷次第ニ可有之様仕度奉存候へとも、若又異論有之、関東ニ深く御関係之筋二而も被為在候而ハ、於私如何共可仕様無之進退相知り可申、私義上 京之儀ハ却而御不都合之次第と奉存候

と、藩の思惑が薩摩・長州・土佐藩等のような国事活動を展望してい

るのではない場合は、自身の上京はかえつて秋田藩にとって不都合になる危険性を指摘している。<sup>(七)</sup>鉄胤は、自身の上京に伴い想定される門人の活動が、情勢探索を期待する秋田藩の思惑に必ずしも一致しないことを認識し、その弊害を指摘していたのであつた。その懸念は周旋方となつた藩内平田国学勢力の活動により現実のものとなり、秋田藩は周旋方罷免後も活発に交流活動を行う彼等の活動に、強い警戒を抱くようになる。

藩主佐竹義堯上京をきっかけとして、在京活動の機会を得た藩内平田国学勢力であつたが、彼等の活動の目的は何だったのだろうか。以下で彼等の具体的な目的について、京都政局の動向を踏まえつつ検討してみたい。

文久三年三月、將軍徳川家茂が参内し、征夷職委任の勅書が下される。これにより、征夷職たる任務、すなわち攘夷政策を幕府の指揮下で実現することが明確に求められ、四月に入ると攘夷期限を五月一〇日とすることが布告される。將軍家茂の参内、攘夷期限の確定により、攘夷の実現が政局の争点となり、長州藩を中心とした攘夷強硬派勢力の政治活動が隆盛を極めることになる。こうした動きに反応して、秋田藩内でも、平田国学勢力を中心として、攘夷問題をめぐる活動が活発化し始める。

六月、將軍徳川家茂が帰府し、その直後、おそらく攘夷政策に関する意見聴取を目的として、幕府より金沢・仙台・秋田・米沢・盛岡藩等東国諸藩に参府を要請する。<sup>(八)</sup>二三日に国許でこの要請をうけた佐竹義堯は、病気を理由に参府を拒否し、周辺諸藩に隠密を派遣して動静

把握に努めるか、同じ頃、江戸では平田延太郎から攘夷政策に関する建言が秋田藩へ提出される。「乍恐飛龍回天之御武威可被為輝御機」と奉存候間、内密左二言上仕候」と始まるこの建言は、攘夷期限を過ぎても攘夷の勅命を遵奉しない徳川家を、「天下二顕然明白たる朝敵逆賊二相違無」と糾弾し、「速ニ御勤王之御義旗を被為拳、関東之逆臣御誅伐」する必要性を唱える。さらに、幕府より到来していた参府要請は「御名義を以」拒否し、速やかに上京の上朝廷を守護するか、叡慮を伺い「関東之逆賊御誅罰被遊候ハ、則征夷大將軍之御大権を御掌握被遊候大機會」であることを提言する。<sup>(56)</sup>徳川家討伐を展望した極めて急進的な幕政批判であるが、実はこの建言が提出される前後、延太郎のもとに、当時在京中の門人である島原藩士の保母建・伊東益荒より以下のような書状が到来していた。<sup>(57)</sup>

一 翰備拝呈候、酷暑之砌御座候処、先生始御家内様益御壯健御機嫌克被為在恐賀之至ニ奉存候、随而兩人東下之節は種々御厄介ニ相成、不慮之義を願ひ御恵ミ被下、御扶助を以上京も無滞十三日二京着仕、道中も無相変、誠ニ穩ニ往行も出来仕、扨京師之模様も誠ニ切迫ニ相成、一日として枕眠仕候事無之周旋仕候、(中略)此度西国は追々震起仕、米藩も誠ニ長藩二内 勅下り候而、此藩より米藩又筑前も皆々説候処、大ニ振ひ、牧和泉等も皆々有志を引連れ、只今ハ上京ニ相成候、平野二郎も禁固を被放、誠ニ難有次第二御座候、(中略)攘夷も諸藩も二布告ニ相成候間、追々海岸見付次第二打攘と申事ニ而、肥後・筑前・久留米・其より中国ニ而芸州・淡州、其外海岸之諸侯も打候手筈ニ相決し候様子、誠

ニ追々攘夷ニも相成候と奉存候、然る処、幕府ニ而は益戎夷<sup>(マア)</sup>之身方ニ相成、已ニ長州ニ而打攘ひ候船ニは、日本人多数居候様子ニ而、幕より玉葉も送り候而、防長を打取候様ニとの事ニ而、誠ニ言語絶し候事ニ御座候、斯る事故、草莽間又は藩士も大ニ怒り、幕府ニ而は兼々戊午以来之違 勅と申し、斯る迫世ニ相成候而も攘夷の模様更ニ無御座、益戎夷を手ニ付 玉階ニも迫る程の模様も相見へ、誠ニ有志も切齒扼腕ニ不堪、其故当形勢は分裂之勢<sup>(マア)</sup>も、近々錦旗もなひく事ニ相成候間、篤と御察し被下、御上京之程早々奉願候、私東下之内ニ、追々手筈は出来仕候間、是又御察し可被下候、其外種々形勢の小変は別紙ニ申上候、宮輪田等其外有志の方々も早々御繰込、偏ニ奉願候、急便故、早々頓首再拜

六月廿二日認

保母建

伊藤益荒

延胤大人

保母等は延太郎に対し、西国諸藩を中心に攘夷決行の機運が高まっていくなか、攘夷を行うどころか「益戎夷の身方」となり、攘夷を決行した長州藩を攻撃する動きをみせる幕府に対し「有志も切齒扼腕ニ不堪」と報知し、こうした「分裂之勢」である状況では「近々錦旗もなひく事」になるため、早急に上京するよう依頼している。幕府役人が外国船に乗り込み、長州藩を砲撃したとするのは保母等が入手した風聞によるものであるが、ここでは延太郎に上京を求める要因として挙げられる、「錦旗もなひく事ニ相成」という点に注目したい。当該期の政治状況下において、錦旗が掲げられる事態としては、攘夷親

征論が考えられる。攘夷親征論は、攘夷期限を過ぎても一向に攘夷実行の機運が高まらない状況への打開策として、長州藩や真木和泉等によって、六月頃より具体化していく政策である。その推移に関しては諸研究に詳しいが、この書状によると、保母や伊東等平田門人も攘夷親征論に連動した動きをみせていたようであり、彼等は攘夷親征の実現にあわせ、「追々手筈」が整った段階における平田国学の中心人物である延太郎の上京を望んでいた。これを踏まえて先にみた延太郎の建言を勘案すると、延太郎の秋田藩に対する上京要求、さらには徳川家討伐の主張は、こうした在京門人等による上京要請をうけたものであったと考えられる。延太郎は京都政局において門人や長州藩等攘夷強硬派勢力と協同した政治活動を行うため、藩主佐竹義堯の上京を求め、前年の「御内勅」問題と同様、秋田藩主導による政治活動を展望する。さらに、周旋方への起用を契機として京都における活動の機会を得た藩内平田国学勢力も活発な動きをみせ、彼等は京都・江戸双方において、秋田藩に中央政局への参入を求めていくのであった。

## 二節 京都における秋田藩

前節まで、平田延太郎を中心とした秋田藩平田国学勢力の藩内における位置付けについて、学問活動から情報活動、さらに藩の思惑を超えた政治活動へと発展する過程をみてきたが、最後に、彼等による一連の活動がその後の秋田藩に与えた影響について検討する。

文久三年八月一日に発生した政変の情報が、九月一日、在国中の佐竹義堯の許に到来する。<sup>(30)</sup> 秋田藩では、八月八日に朝廷より、「方今

追々不容易時勢二付」として急速上京の命じる達が到来し、評議の末、一〇日に藩主義堯の上京方針、横手城代の戸村十太夫を家老に任命の上先発上京を命じる方針が確定していた。<sup>(31)</sup> しかし、御所周辺で発生した非常事態や、京都を追われた長州藩や浪士等が諸方に分散している現状では、「早速可相鎮と不被存恐怖之御時勢」であるとして、京都情勢が鎮静化するまで、義堯の上京を暫時見合わせる方針へと転換し、京都の情勢把握を、家老戸村十太夫と京都留守居長瀬隼之助が担うことになる。

そのころ、京都では、政変以前より秋田藩にとつての懸念事項であった、藩内平田国学勢力による諸藩との交流が、戸村入京後も依然として行われていた。秋田藩は、義堯上京以降京都における他藩士との交流を抑制していたが、こうした方針を無視して交流活動を続ける藩内平田国学勢力を問題視し、やむを得ない場合は彼等を国許へ送還すべきことを検討するまでに至る。<sup>(32)</sup> こうした発言からは、彼等の活動に対する秋田藩の危機感が認められるが、彼等の交流活動は、秋田藩にとつてどのような不都合が生じることになったのだろうか。当該期京都における藩内平田国学勢力の具体的な活動を示す史料を現時点では見出せてはいないが、在京諸藩士による交流活動と、そこで繰り広げられた議論のなから、これらの活動の一端を探ってみたい。

八月政変の発生により、長州藩等攘夷強硬派が主張したような急進的な攘夷方針は後退していったが、攘夷政策自体が否定されることはなく、対外問題は依然として議論の争点であった。京都では、破約攘夷の限界を認識し、それに代わる対外政策を確立するために、新たな

政治体制の構築を目指す薩摩藩と、それに対する批判から、また攘夷の実現を志向する立場から、政変直後から議論になっていた長州藩寛典処分を要求する鳥取藩や岡山藩との間で対立が生じ、両勢力による諸藩の取り込み工作が水面下で繰り広げられていく。<sup>(65)</sup>

文久三年一〇月、盛岡藩主南部利剛は京都警衛の任にあたるため上京するが、直前に発生した政変に関する情報と、その後の京都情勢を探るため、藩士である江幡梧棲に情勢探索を命じる。<sup>(66)</sup> 江幡は自身の交流関係を駆使した情報活動を行い、盛岡藩に詳細な情報をもたらすことになるが、そのなかに、文久三年後半期に、薩摩藩による攘夷政策の放棄と、それに対する鳥取藩等の反発の状況について、土佐藩士より報されている。<sup>(68)</sup> これに関しては別の機会で触れたので詳しくはそちらに譲り、ここでは本稿に関わるものとして、その過程で入手した、諸藩の鎖港政策に対する意見についてみていきたい。

鎖港政策は、長州藩等の攘夷強硬論に代わる攘夷政策として、幕府が八月一二日に諸藩へ横浜鎖港談判を布告したことに始まる政策で、八月政変の後、幕府は諸外国と鎖港談判を行うことになる。<sup>(70)</sup> 江幡はこの政策に関する諸藩の主張について、尾張・徳島・鳥取藩等が即時鎖港論を主張していたという情報を得るが、そのなかでも、秋田藩はとりわけ急進的で、「既に長州一味と被申候程之評判」であるという。さらに、攘夷政策とは直接的には関係しないが、別の会合で江幡は、翌年に予定されている將軍家茂の再上洛を前に、佐賀・土佐藩等一〇万石以上の諸侯がことごとく上京するなかで、「秋田計りハ深く疑ハレ候上に、何歟中川宮にさからひ候により、御上洛御差留」になった

との噂を聞いている。秋田藩の上京延期方針については先にみたとおりであったが、攘夷政策に関する情報を踏まえて勘案すると、京都の周旋方レベルでは、秋田の上京延期は、攘夷政策について「長州一味」同様の立場とみられていたことが、朝廷より忌避された要因とされていたのであった。藩内平田国学勢力の活動について秋田藩が危惧していたのは、彼等の活動を通して、他勢力からこのような秋田藩に対する認識が形成されることへの危機感であったといえよう。これらの認識が藩内平田国学勢力の活動や発言に基づくものであると断定はできないが、少なくともこの時期の在京藩士は、他藩士との交流を制限されていた影響で、自由に他藩との交流を持つ機会は極めて限定されていた。そうした藩の思惑や規制を超えて他藩士と交わることができたのは、在京の藩内平田国学勢力以外に想定できない。秋田藩は、こうした認識が増長するのを防ぐために、彼等の活動を抑制する対策を練らなければならぬ事態に陥っていた。文久三年段階において藩内平田国学勢力は、秋田藩の政治的立場に大きく影響を与える政治勢力にまで発展していたのであった。

### おわりに

以上、平田国学と秋田藩との関わりについて、秋田藩の学問・情報政策への関与から、藩内平田国学勢力による政治活動へと発展する過程を検討してきた。平田篤胤の江戸追放後、秋田藩を拠点とした活動の場を与えられ、その後鎮胤・延太郎を中心とした学問活動を通して、秋田藩内に支持基盤を獲得していく。幕末期になり、京都を中心

とした情勢把握の必要性に迫られる秋田藩は、彼等が形成した門人ネットワークをもとにした情報収集能力に注目し、藩の情報政策の一端に鉄胤・延太郎を位置付けていく。平田国学は、情報活動を通して藩政への関わりを深めていくことになる。

秋田藩の学問・情報政策下において活動の機会を得た藩内平田国学は、自身の建言から実現した平田延太郎による京都情勢探索により、文久期以降の国事周旋活動と関わり始めていく。京都において延太郎は、門人等を介した交流関係を通して公武周旋活動への協同を志向し、秋田藩の国事活動参入を目指す政治工作を行うことになる。さらに、文久三年になると、彼等の目的は、秋田藩を挙げて朝廷を輔翼し、攘夷政策の実現を目指す活動へと発展していく。その後、藩主佐竹義堯上京に際して周旋方に任命された、藩内平田国学勢力の京都における周旋活動の影響もあり、秋田藩は、他勢力から長州藩と同様の志向性を持つ政治勢力と認識されるまでに至る。

当該期京都で活動していた他の門人や浪士の多くが、藩を超えた横断的な結合に基づく活動を展開していたのに対し、平田延太郎を中心とした藩内平田国学勢力の活動は、そうした勢力との連動を志向しつつも、あくまで秋田藩を主体とした政治活動を展望していく。こうした彼等の活動は、平田篤胤の江戸追放以降、平田家による諸活動が、秋田藩との関わりで成り立っていたことに起因するのではないだろうか。すなわち、本稿で検討してきたように、平田国学は秋田藩によって彼等の持つ学問的要素や情報網を藩の政策に位置付けられ、彼等がこうした藩の要請に応えることで、秋田藩の庇護下で安定的に国学研

究・普及活動を行うことが可能となっていた。彼等は、気吹舎存続という観点からも、秋田藩という枠組みを超えた活動を展望することは困難であつたと考えられる<sup>①</sup>。

こうした規定性をもつ藩内平田国学勢力が、他の門人等と連動した活動を行うためには、彼等の活動に対する秋田藩の支持が必要となってくる。そのため彼等の活動は、秋田藩に対する政治活動の要求へと収斂されていく。藩内上層部に平田国学擁護者が存在したことも、こうした活動をより活性化させる一因であつたが、彼等の政治活動は、自らが主体となる周旋活動ではなく、藩首脳部、さらには藩主佐竹義堯の奮起を求めることに主眼が置かれることになる。彼等の発言や活動による藩政の動揺を恐れた秋田藩が、彼等に対して情報統制や交流制限という措置をもって活動の抑制を試みたのも、こうした彼等の志向性に対する危機感によるものであつた。文久期以降の秋田藩は、藩内における彼等の影響力を如何に抑制していくかが大きな課題となっていく。

最後に、その後の藩内平田国学勢力の活動について、政局との関わりから展望を示しておきたい。元治元年（一八六四）七月の禁門の変における長州藩の敗北は、攘夷政策実現の可能性を消滅させる契機となる事件であつた<sup>②</sup>。この後の政局は、攘夷政策の棚上げ、幕府主導による長州征討を目指す活動へと展開し、新たな動きをみせはじめる政局に、秋田藩も取り込まれていく。禁門の変の後、秋田藩は幕府より元治元年三月に蜂起した天狗党鎮圧、さらには長州征討のための將軍進発を想定した江戸警備の任を命じられることになる。やがて秋田藩

が幕府に追従する姿勢を見せ始めると、藩内平田国学勢力の発言は、幕政批判から、幕府追従方針をとる藩首脳部批判へと移行していく。禁門の変以降の秋田藩は、藩首脳部と藩内平田国学勢力による政策対立が激化していくことになるが、この点は別に検討していきたい。

## 註

- (1) 安丸良夫『近代天皇像の形成』(岩波書店、一九九二)、深谷克己「村役人層の位置規定と国学受容」(同『近世の国家・社会と天皇』校倉書房、一九九二)。
- (2) 宮地正人「幕末平田国学と政治情報」(同『幕末維新期の社会的政治史研究』岩波書店、一九九九)。
- (3) 吉田麻子「気吹舎における出版と費用」(『東洋文化』九〇、二〇〇二)。
- (4) 伴五十嗣郎「福井藩に於ける平田学の興隆」松平春嶽・中根雪江を中心として」(『國學院雑誌』七四一一、一九七三)、岩田みゆき「幕末における『草莽の軌跡』野城広助の日記」(『東国民衆史』一〇、一九八四)、阪本是丸「角田忠行翁小伝」(熱田神宮、一九八九)等。
- (5) 宮地氏は、平田父子の政治目的について、「秋田藩の藩論を平田国学的な政治コースに可能な限り引き寄せようとする」としている(前掲(2)宮地論文、二二六頁)。
- (6) 加藤民夫「幕末期秋田藩の政治思想—平元貞治をめぐる三つの思潮—」(『秋大史学』四六、二〇〇〇)、同「幕末政局と秋田藩の選択—文久・慶応期の分権的対応をめぐって—」(『秋大史学』五三、二〇〇七)等。
- (7) 田原嗣郎「平田篤胤」(吉川弘文館、一九六三)二六六頁、中川和明「平田篤胤の国学思想と江戸追放」(『神道史研究』五二一一、二〇〇四)九三頁。天保期における幕府の思想統制については、藤田覚「天保の改革」(吉川弘文館、一九八九)一〇四—一五頁参照。
- (8) 天保八年九月に幕府より生田万との関係について幕府より尋問されている(『気吹舎日記』天保八年九月七日条)『国立歴史民俗博物館研究報告』二八 平田国学の再検討(二〇〇六、二二頁)。

- (9) 宇都宮孟綱「御用略日記」三、天保二年一月二十四日条(『宇都宮孟綱日記』一『秋田県公文書館、二〇〇六』一二九頁、以下「宇都宮」)。
- (10) 金森正也「寛政期秋田藩における改革派官僚の形成—いわゆる「人材登用」について—」(『秋田県公文書館研究紀要』八、二〇〇二)、同「近世後期における藩政と学問—寛政—天保期秋田藩の政治改革と教学政策—」(『歴史学研究』八四六、二〇〇八)。
- (11) 渡辺綱次郎「近世秋田の学問と文化—和学編—」(秋田文化出版、一九九九)一四六—一五四頁。大友直枝は社家大頭として秋田藩領の社家を統括する立場にあった。大伴直枝については同書による。なお、直枝は文化二年(一八〇五)に本居学入門する一方で、文化九年(一八二二)には気吹舎に入門している(『門人姓名録』一『新修平田篤胤全集』別巻、名著出版一九八二)二四八頁、平田国学門人の入門年月日については同書による)。
- (12) 加藤民夫「秋田藩校明德館の研究」(カッパンプラン歴史文庫、一九九七)一九六—一九七頁。
- (13) 「宇都宮」九、天保一三年九月一六日条(前掲(9)『宇都宮孟綱日記』一、三三二頁)。
- (14) 前掲(8)「気吹舎日記」天保一三年九月二八日条、一七二頁。
- (15) 同右、天保一三年九月一七日条、一七二頁。
- (16) 「気吹舎日記」によると、秋田藩の平田家召し抱え、藩邸内の長屋拝借の後、鎌胤による秋田藩邸廻勤の記事が散見し、藩士との交流が増大する。廻勤の目的について詳細は不明だが、時に藩士宅で講談を行うこともあったよう(天保一四年四月一五日条、一七八—一七九頁)、平田国学の普及活動という目的が想定される。
- (17) 前掲(8)「気吹舎日記」嘉永二年二月二八日条、二二六頁。
- (18) 鎌胤の江戸より秋田までの経路については、『特別企画 明治維新と平田国学』(国立歴史民俗博物館、二〇〇四)四一頁参照。
- (19) 奥州における門人と彼等の活動については、熊澤恵里子「奥州平田門人早田伝之助の教育活動—心学から平田国学へ—」(『地方教育史研究』二八、二〇〇七)参照。
- (20) 前掲(8)「気吹舎日記」嘉永三年七月一六日条、二四一頁など。
- (21) 桂島宣弘「幕末国学の転回と大岡隆正の思想—国学における「政治」と宗教—」(同『増補改訂版幕末民衆思想の研究』文理閣、二〇〇五)。
- (22) 前掲(2)宮地論文、二〇五頁。
- (23) 同右、二〇六頁。

(24) 篤胤と小野岡松翁は、篤胤の江戸追放以前から関係を持っていた。具体的な関係については今後の課題としたいが、秋田送還後も篤胤が松翁と頻りに面会し、篤胤の身上などに関し松翁に相談していることが確認できる(天保一三年四月二日付平田篤胤→平田鏡胤へ渡辺金造「平田篤胤研究」(復刻) 鳳出版、一九七八、六六八～六七〇頁)。

(25) 前掲(18)『明治維新と平田国学』六一頁。

(26) 文久期の長州・薩摩両藩による政治運動については、井上勲「開国と幕末の動乱」(同編『日本の時代史20 開国と幕末の動乱』吉川弘文館、二〇〇四)、佐々木克「文久二年久光の上京と朝幕改革」(同『幕末政治と薩摩藩』吉川弘文館、二〇〇四)、原口清「幕末政局の一考察」文久・元治期について(『原口清著作集』幕末中央政局の動向)岩田書院、二〇〇七)、高橋秀直「幕末維新の政治と天皇」(吉川弘文館、二〇〇七)等参照。

(27) 前掲(2) 宮地論文、二〇九頁。

(28) 拙稿「文久・元治期における秋田藩の情報政策」京都・江戸との関わりから」『東北文化研究室紀要』四八、二〇〇七、四六、四八頁。

(29) 「戊辰五月出立前年寄衆へ差出候扣」(「平田篤胤関係資料」書翰一九四一九、国立歴史民俗博物館所蔵)。本文中への史料引用に際し、煩雑となるため、平出等は同じ字同様に一字空けとし、旧字も基本的に常用漢字に改めた。

(30) ちなみに、小野岡右衛門は、国許御用繁多のため、六月五日に帰国となる(「宇都宮」文久二年六月五日条(佐竹(宗家)文庫)AS—三二二四五一九四、秋田県公文書館所蔵)。

(31) 平田延太郎「上京旅中日記」(「平田篤胤関係資料」冊子一一三三)。

(32) 平田延太郎「大坂并京都表風聞之覚」(「平田篤胤関係資料」書翰一九四一七)。

以下、特に断らない限り、延太郎の探索については同史料による。

(33) 当該期の小河一敏の活動については、後藤重巳「外様小藩における勤王動向」豊後岡藩と小河一敏」『日本歴史』四四三、一九八五、原口清「文久二、三年の朝廷改革」(前掲(26) 原口著書) 参照。

(34) 前掲(26) 佐々木論文、七八～八二頁、前掲(26) 原口論文、一四四～一四六頁。

(35) 小河一敏「王政復古義挙録」(「幕末維新史料叢書」五、新人物往來社、一九六九) 七七～八一頁、前掲(26) 原口論文、一四七～一四八頁。

(36) 文久二年六月一〇日付小河弥右衛門→平田延太郎(「平田篤胤関係資料」書翰一九四一八)。

(37) 当該期の岩倉に関しては、佐々木克「幕末維新の個性⑤ 岩倉具視」(吉川弘文館、二〇〇六) 参照。

(38) 小河によると、先にみた小河の建白は岩倉と大原重徳の催促により提出したものであり、勅使下向前後の岩倉と小河の交流が確認できる(前掲(35)「王政復古義挙録」七七頁)。

(39) 「平田篤胤関係資料」書翰九四・五。

(40) 同右。

(41) 文久二年六月二日付岩倉具視→中山忠能・正親町三条実愛(日本史籍協会編『中山忠能履歴資料』三、(復刻) 東京大学出版会、一九七三) 三三三～三三七頁。

(42) 延太郎のもたらした国事周旋要請に対する秋田藩の対応については、前掲(28) 拙稿、四六～四七頁参照。

(43) 文久二年八月、佐竹義就(改名し、「義楚」となる(「宇都宮」九四、文久二年八月二日条(佐竹(宗家)文庫)AS—三二二四五一九四)。

(44) 「江府勤事」二、文久二年閏八月二七日条(佐竹(宗家)文庫)AS—三二二六四二)。

(45) 佐竹義楚は、宇都宮常侍・平田鏡胤上京に際し、宇都宮へ「決而御内勅等之儀は取計不申」と念を押す、諸勢力との交流により想定される、政治参入の危険性に対し警戒している(「宇都宮」九六、文久二年一月二六日条(佐竹(宗家)文庫)AS—三二二四五一九六)。

(46) 生麦事件償金支払い問題とそれに対する幕府の対応に関しては、小野正雄「幕藩権力の解体と幕府の外交政策」(同『幕藩権力解体過程の研究』校倉書房、一九九三)、奈良勝司「奉勅攘夷体制下における徳川將軍家の動向」文久三年將軍上洛後の性格規定をめぐる相克」『日本史研究』五〇七、二〇〇四、等参照。

(47) 小野正雄監修「杉浦梅譚目付日記」(みずうみ書房、一九九二) 一一六頁。

(48) 宮内庁蔵版「孝明天皇紀」四(平安神宮、一九六九) 三八五～三八八頁。

(49) 文久三年三月二〇日付小川龜雄→平田延太郎(「平田篤胤関係資料」書翰一八一六二)。

(50) この点に関しては、前掲(28) 拙稿で検討した。

(51) 文久三年一〇月二八日付戸村十太夫→国許家老連名「白筆御用状扣并内書扣共」(「戸村文庫」AT—三二二一六〇、秋田県公文書館所蔵)。

(52) 「平田篤胤関係資料」書翰一二三二一四五一二。

(53) 前掲(49) の書状中で小川龜雄は、延太郎に対し、三月一八日に三条河原へ晒さ

れた坊主の首に掲げられた書付を写し取った旨を報知しているが、その写しを求めて諸藩士が小川の許を訪れ、「都合上四、五人正かし」という。周旋方罷免後も、京都における諸藩士の情報活動に小川も加わっていることが窺える。

- (54) 日本史籍協会編『官武通紀』一（復刻）東京大学出版会、一九七六、五七五～五七八頁。

- (55) 「宇都宮」九七、文久三年六月二十四日条（佐竹（宗家）文庫「AS—三二—二一—四五一九七」）。

- (56) 羽生氏熟編「風雲秘密探偵録（抄）利（維新史料引継本Ⅱ）は二五二—三、東京大学史料編纂所蔵」。ただし、この建言が秋田藩に提出されたという確証は、現時点では見出せていない。「内密左三言上仕候」とあるように、正式に藩へ提出されたものというよりは、当時在府家老であった洪江内膳へ内々に提出された可能性がある。洪江内膳は、文久元年に家老に就任し、小野岡右衛門とともに、秋田藩において幕末期平田国学の有力な支持者であった。

- (57) 文久三年六月二二日付保母建・伊東益荒↓平田延太郎（平田篤胤関係資料）書翰一六七、「国立歴史民俗博物館研究報告二二—平田国学の再検討（一）」一八八～一八九頁。ちなみに、前掲（11）「門人姓名録」によると、保母は文久三年八月に蜂起した大和天誅組に、伊東は翌元治元年蜂起の筑波天狗党に加わり、それぞれ戦死している（三〇四頁）。

- (58) 攘夷親征問題については、原口清「文久三年八月一日政変に関する一考察」（前掲（26）原口著書）、佐々木克「文久三年八月政変と薩摩藩」（前掲（26）佐々木著書）参照。

- (59) 「宇都宮」九八、文久三年九月一日条（佐竹（宗家）文庫「AS—三二—二一—四五一九八」）。

- (60) 前掲（55）「宇都宮」九七、文久三年八月八日条。

- (61) 同右、文久三年八月一〇日条。

- (62) 文久三年九月二九日付金大之進↓戸村十太夫（「戸村文庫」AT—三二—二一—三八一」）。

- (63) 前掲（28）拙稿、四九～五一頁。

- (64) 佐々木克「元治国是会議と島津久光」（前掲（26）佐々木著書）二一九～二二〇頁。

- (65) 拙稿「禁門の変と秋田藩—内乱回避をめぐる諸藩周旋活動の一側面—」（『文化』七二—一・二、二〇〇八）。

- (66) 野々村真澄「京都公私ちりふくろ」（二二—五一九六、岩手県立図書館所蔵）。

- (67) 江幡梧楼の人脈については、宮地正人「幕末の政治・情報・文化の関係について」

- （同『幕末維新期の文化と情報』名著刊行会、一九九四）二二～二三頁参照。

- (68) 那珂梧楼「京のち利」乾（二二—五一九五—一、岩手県立図書館所蔵）。以下、諸藩の攘夷政策に関する発言については、特に断らない限り同史料による。

- (69) 前掲（65）拙稿、三～五頁。

- (70) 横浜鎖港政策については、前掲（46）小野論文、奈良勝司「横浜鎖港期における徳川政権の動向」（『ヒストリア』一九七、二〇〇五）等参照。

- (71) ちなみに、宮地氏は安政期の鉄胤について、「篤胤の養子鉄胤は佐竹藩士であり、同藩は外様ながらも諸代藩以上に親藩的な大藩である。開港直後、安政大獄の大暴風雨が吹きすさぶそのまっただ中で、外国貿易反対を言う筈がない。（略）しかも鉄胤には、義父篤胤が幕府の怒りをもって秋田に追放されたという苦い経験をしている。許された諸条件のもとで、篤胤の業績を普及する、という立場を彼は堅持していた」と、秋田藩平田国学の規定性について指摘している（宮地正人「新撰組と平田国学—宮和出又左衛門光胤を手掛かりとして—」（『国史学』一九五、二〇〇八、二～三頁）。氏の指摘は安政期の鉄胤を対象としたものであるが、こうした彼等の立場や経験が活動に及ぼす影響は留意すべきであろう。

- (72) 原口清「禁門の変の一考察」（『原口清著作集』王政復古への道）岩田書院、二〇〇七）二二一頁。

#### 【付記】

本稿執筆にあたり、史料の閲覧・撮影等の際して、国立歴史民俗博物館・東京大学史料編纂所・秋田県公文書館・岩手県立図書館に御世話になった。末筆ながら記して御礼申し上げたい。